

● 始まりは演奏会に行くときの帽子つくらむと思ひしことなり

布宮慈子

一連タイトルは「ベレー帽」。その始まりの歌。一連から、演奏会は山形交響楽団のもの。会は中止で、ネット配信になったようだ。マスク手づくりはこの間よく聞いたが、ここでは帽子、それもフェルト帽。歌からは、ネットで生地を求め、たぶんミシンもつかう。

モスグリーンのものできた。出来映えも「なかなかである」(四首目)。

家の中で帽子かぶつて山響の演奏聴きぬマスクはせずに

こんな歌になった。当然に窮屈な感じがある。滑稽味もある。結句、マスクはせずに、も含めて今がある。先が不透明で、先のこと「誰も知らない」(九首目)。今は続いている。

一連の家居のなかで、つまりは何かして(ここでは手仕事)してのいでいるなかで、それでも詠うことはしている。「涙にじみ来、日常は遠し」(七首目)、ここから、

縫ふことは祈りに似たりミシン踏むたびにことばが生まれては消ゆ

読み手も作者の時間の近くにいます。

● 風はやも春の気配にかわりつつ街の彼方に夕焼赤し

市川茂子

春風という言葉があるように、風から変わってくるような感じはある。風には風向きもある。身体感覚として気配。その覚知は待つていけばことにはやいものだろう。

そのうえに春は他所からやってくるような感じがある。作者は街住まい。したがって街の彼方をみてしまう。気配に、と彼方に、の、に、に出てくる順接感と逆接感。夕焼赤し、はいつものようでもない。説明しようとすると言葉があるが、歌はそのとおりのもの。

との曇る早春の山かすかにも芽吹きさざし風の音きく

前の歌で、箱根路の旅に出ている、そこでの歌か。山を見ている山の中、そこでもみるもの、聞くものがある。この歌も何も説明がいらぬようなそのとおりの感じがある。そこがいい。

街路樹の根元うずめてとりどりにつつじ咲きつく街の静もり

咲きつく。時間か、場所の連続感か。つつじの色彩は仕方のないものでもある。眼に入ってくる。結句、街の静もり、は今の街の状態だろうか。「災害に登山電車は横たわり」が他の歌にあるが、この歌を含むうしろ三首をコロナ感染の渦中の歌と読んだ。

● 春浅き朝の寝ぼけまなこにて新聞受けまでスロープ下る

河村郁子

これは一連「放置自転車」のさいしょの歌。春の早朝に扉にもたせかけた自転車を見つけたことから始まった撤去されるまでの事件というか、その顛末がドキュメント風につづられた。簡単にすまないやりとりが、五回目までつづく。最終的に(六日後に)撤去されるまでの顛末である。

面白い。というか淡々と事実がつづられたことで、作者のつどの口吻は抑えられているもの、おのずとにじむ。途中の歌、これらが三回目と四回目のやりとりになる。

区役所の電話番号教へられ詳細語れば「担当は支所：」

支所にしても状況話せば「引き取りは問合せセンターに依頼せよ」

おもわず改めて、たらい回し、を辞書にみることになった。元々は、「足で、盥を回す曲芸」とある（『新明解国語辞典』第五版）要は、見世物なのだ。

前号作品短評B 〈慈子〉

●水かえをするのみなれどチューリップ室に花あることのうれしさ

小野澤繁雄

よくわかる歌である。「チューリップ」でいったん切れる。「室」は「へや」と読ませるのだろう。二首目は少し難しい。

チューリップでまだあるようなただきしそれも稀なる花を室置き

ぎりぎりチューリップといえるような、頂戴した（花）、それも非常に珍しい花を部屋置きにしている。ことばの並びは詩のようでもある。

チューリップについて調べてみた。「外観は、花卉の先端が丸いもの・尖ったもの・フリル状のものもある。咲き方は一重から八重で、一つの球根から複数の花がつくもの、すばまった状態で開花するものや花卉が外側へ反り返り全開して開花するものなど。花色も青以外の赤・黄・オレンジ・白・緑・紫などの単色や複数の色のものなど、数百品種のチューリップが存在する。青バラと同様に多くの育種家によって青いチューリップの開発が進められているが、花卉全体が青い品種は発表されていない」（フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』より）。チューリップの種類は多く、十七世紀のはじめごろオランダでチューリップ取引が行われ、「チューリップ相場」という言葉まであったということだ。日本での栽培は、富山県と新潟県がほとんどを占めて

いる。

母の家の片づけごとんきているに何のはずみか学帽飾る

作者の実家の片づけは遠距離ということもあり、まだ続いているようである。

●目印を辿れば奈落蝶の昼

新野祐子

季語は「蝶の昼」で春、とのことだが、その意味するところが今ひとつつかめない。毎日一句を取り上げて鑑賞していた清水哲雄さんのインターネットサイト「新・増殖する俳句歳時記」(二〇一六年八月八日で終了。なお「新」となつてからは清水さんのほかに何人かが参加し、曜日ごとに担当)より引用する。

そこまでが少し先まで蝶の昼

深見けん二

(略) 掲句は「蝶の昼」という華やかな季題によつて、舞い遊ぶ蝶に「そこまで」の用事を一歩も一歩と誘導されているようだ。しかし、浦島太郎よろしく「ああ、こんなところまで」と詠嘆の大時代的な言いでないところが、現実の静かな実感である。しかし「少し先」には、いつもの「そこまで」とはわずかに違う、ささやかな甘い余韻が漂う。隣りに並ぶ(蝶に会ひ人に会ひ又蝶に会ふ)では、掲句よりさらに先まで、めくるめく感覚に歩を進める。次元の裂

け目に移ろうように、ひらひらと心もとなく舞う蝶を寄り代にして、現実をまぼろしのように見せ、危うく美しい無限世界を描いている。『蝶に会ふ』(2009) 所収。(March 17 2009 土肥あき子)

やはり、蝶に惑わされるように目印を辿つて行つてみるとそこは奈落であった、と解釈できる。明るところから暗転するような怖さを表現している。

いま芽吹く櫛はますらお触れてみる

「葉山山行三句」の最後の句。雪が消え、新芽が出はじめたブナは「ますらお」という。ますらおは雄々しく強い男のこと。みずみずしく、樹皮が滑らかなブナにそつと「触れてみる」行為はエロティシズムを感じさせる。なお、櫛(ぶな)は季語にあらず、「芽吹く」が季語である。